身代札の由來

身代の御守は、天保二年三月眼藏上人の時代、仁王門再建の時より始まれり。其起原は、再建事業に從へる諸職工に渡せし鑑札にして、當中世話方三十間堀近江屋七兵衛、專ら此工事に盡力せり。上棟式の當日、本山より職方一同へ酒肴の馳走あり。神田末廣町大工長五郎、一盃機嫌にて長梯子を攀ぢ、今や最高の足代に手を掛けんとせる刹那、過つて五六丈の地上に墜落したり。居合せたる人々は周章狼狽、打寄り見れば、彼は夢より覺めたる如く茫然として起き上り、身に一點の傷も痛みもなし。人々不思議の奇特に感じ、能々身體を檢めて視るに、孫て渡されありし成田山木尊明王の鑑護なるを知り、眼藏上人に懇請して、遂に一般に頒つことゝせるなりといふ——身代札の靈驗奇特に就てはその列挙なる枚挙りしといふもの、實に幾千萬人なるを知らず。現に成田山顚堂其他に事の由を記して納めあるもの、頗る多し。暫くて年々頒たるゝ所の身代札は一百萬枚の上に出づと聞く——固みに、曾つて、教育上の參考資料にとて、東京市内に於ける小學校に就て、各兒童の携帶せる御守札なるものを調査せしことあり。其結果によれば、百人中七十二人までは成田山の身代札を所持し、殘りの二十八人中、虎の門の金毘羅、蛎殼町の水天宮、淺草の觀音等の御札を所持せるもの二十二人、他の六人は全く何ものをも携帶せざりしといふ。家庭の信仰、世間の信仰、また併せて窺ふに足らん。

成田山

成田山誌

東京を距る東十有六里、下總國印幡郡成田町に、大聖不動明王唯一の靈場たる成田山神護新勝寺あり。緣起によつて知らるゝ如く、寺は朱雀天皇の天慶三年宇多天皇の御子敦實親王の第二子寛朝大僧正が、逆賊調伏の勅を拜し、弘法大師親しく刻める所の不動尊を奉じて、遙に本國公津ケ原に來り、壇を築きて三七日の丹祓を凝らしつゝ不動護摩の大法を修せられ、偉功を奏して叡感ありし靈像を安置し奉れる名刹にして、爾來春風秋雨殆ど一千年、靈驗ます〳〵顯著に、參拜の緇素、四時群を爲し、『成田山』の名、天下に喧傳す。今こゝに其沿革を略叙せん乎。

成田山の沿革

開山寛朝大僧正　先づ沿革を稽ふるの初めに於て、開山寛朝大僧正を傳せんに、僧正は五十九代宇多天皇の第八の皇子、二品式部卿敦實親王の第二の皇子なり。御母は更衣の女御、左大臣藤原時平の女延喜十五年乙亥の御誕生、十一歲にして御剃髮、父宇多法皇の室に投じて御落飾あり、天曆二年密乘の碩德寛空大阿闍梨に隨つて、仁和寺に於て灌頂を受け、又壹定

法師に就て顕密の奥義を極め、最も事相に精通し廣澤一流の祖と稱せらる。天慶三年御年二十六歳勅を奉じて下總に下り、平將門を調伏す。是より先き追討使右馬頭平貞盛出征に臨み、僧正を拜して佩劍を捧げて加持を受く。康保元年仁和寺々務に補せられ貞元二年少僧都に昇りて法務職を兼ぬ。此歳冬東寺三長者に加はり勅して西寺を領せしむ。天延二年齢六十權大僧都に任ず。同三年東大寺華嚴會を修し、同冬兵衛府修法の導師を勤め、天元三年延暦寺中堂供養の咒願師たり。同四年僧正に任じ、東寺々務に補せらる。永觀元年圓融寺落慶供養の導師を勤め、封一百戸を賜ひ、東大寺々務を領す。寛和元年左大臣源朝臣精舍を仁和寺の西に建て、師に献ず。蓋し左府は師の昆弟にして、且つ師檀の契あればなり。同年三月年七十一圓融天皇深く御歸依あらせられ、終に僧正を師として、御落飾法諱を覺如と稱し給ふ。同二年大僧正に任ず。是れ本宗大僧正の始祖なり。永延元年夏大に旱す。勅を奉じて南都六大寺の僧を大佛殿に集め、雨を祈る。翌日大雨降り、雷霆大佛殿の側に落つ。朝野驚嘆せざるなし。永祚元年廣澤に遍照寺を建立し、左大臣以下公卿集會す。同年僧正七十五歳圓融法皇東寺に於て南部灌頂を受け給ふ。職衆八十人、法儀齊々たり。始め法皇御不豫あり、嶽山及東寺の頂禱を請じ、五壇の法を修せしむ。嶽中壇は慈惠僧正、元三大師之を修し、僧正は降三世壇を修し、共に明王の影像を現ず。法皇叡覽し給ひて、勅朝鞭ち痊ゆ。長德四年六月十二日、忽然として廣澤遍照寺に化す。春秋八十有四、法臘七十有三にぞありける。

嶽中興以前の成田山　當山本尊は最初公津ヶ原に安置せられ、やがて朱雀天皇より供田並に寺號を賜はりしが、古傳によれば其後此地の永住に不便なるより近郷の古老相會し、成田を以て相應の地となし、此に遷し奉る。即ち今の成田山是れなり。而して其相會して評議せし地を論田と呼び、不動塚と稱する遺跡も存し、遷座の際護衛の任に當りし村を國護堂といふと。又云ふ當山の現境内は最初の遷座地にあらず、古傳によるに最初論田より一旦古藥師に御遷座あり。現に今成田小學校前鐵道線路に沿ふたる窪地に、字古藥師と稱して泉の湧き出づる所あり。其泉は即ち『みたらし』の跡なるが、靈驗日に顯たにして參詣者多ければ、附近地主に苦情起りて遂に向坊に移し奉る。その向坊は現境内と相對せる今の愛宕山にして、愛宕山には、倚古堤内の名稱殘れり。然にまた幾十百年かの星霜を經て其後更に現境内に遷座ありしものならん。而して、その遺跡には維新後まで將軍地藏を安置せりきと。嗟惜むらくは舊記の徵す可きな

く御遷坐の時代乃至中興以前幾百年間の事歴を確め難きを斯くて歴代の法脈すら詳かに知るを得ず元祿中興以前に在りては本山の過去帳に先師として登錄せられあるもの實に左の十三代に過ぎず。

宥鏡―隆長―尊有―宥俊―長海―澄淨―宥覺―照禪―照三―宥隆―照慶―宥慶―照源

◎中興以後の成田山　寛朝大僧正の開基より七百六十年を過ぎて元祿十三年九月二十六日、先住照源上人遷化の後を承けて下總國香取郡醫王院より晋山せられたるを中興第一世照範上人と爲す。上人を推して中興第一世と爲す所以は其德望其經營全く當山の面目を一新したればなり。即ち先々代以來發願計畫せられたる本堂は、上人晋山の翌年三月十八日を以て落慶入佛の供養を執行せられたるを初めとして、三門、總門、鐘樓、辨財天堂、常燈明堂等を造營し、或は江戸深川に於て、初めて六十日間出開帳を行ひ、又は佐倉城主稲葉正通公より料田を寄せられ續て諸堂宇の造營に其他に、功業最も大、法幢爲に大に振へり。照譽師、照融師また夫々盡さるゝ所多く、照嶽上人に至て豪宕淵逸現に在る輪奐莊嚴目を驚かす所の本堂を經營せられ嘉永の末年に起工して安政四年愈々上棟を爲すに當り一百日間江戸出開帳をなし翌五年八月盛んなる落慶入佛供養を行ふ期

くて照嶽師積極的發展に空前の偉功を擧げられたるも、必至の結果として負債山積加ふるに法類間の紛糾に、其他に、内憂外患一時に臻り、而も幕末擾亂の時に際す、照順師之を承けて未だ拯濟の策を講ずるに及ばずして蚤逝し、殆ど本山をして危急の一大渦中に沈ましめんとするの時に當り、本尊明王冥護の眸を垂れ給ひ、一偉人を下して窮局を拯ひ給ふ、即ち學業一世に高く、道德千古を曠ふする第十三世原口照輪上人なり。慶應三年、上人推されて一山の主權を執るや、至誠事に當り、勤儉自ら持し、進んでは講中信徒を增し、數年を出ずして十數萬兩の負債を償却し、尚餘力能く成田山今日の基礎を築く、上人の如きは、眞に第二の中興と稱す可きなり。然り而して、此溫厚篤實なる照輪和尚に繼ぐに、英才俊敏學德兼備の三池照鳳僧正を以てし、三たび之を承くるに謹嚴公正、高潔偉大なる現山主石川照勤僧正を以てす。照鳳僧正が明治十六年住職の任に就きてより隱退さるゝまでの十年間、堂宇の造營に、其他に、如何に偉功あり、辨た慈善公益の爲め、如何に盡さるゝ所の多かりしやは、事未だ世上の見聞に新ならん、若し夫れ現照勤僧正の盛德鴻業に至ては更に〳〵眼のあたり萬人衆の仰いて以て感泣讃嘆するところ、斯くて本尊明王の威靈はいよ〳〵發揮し、成田山の事業はますま

す顕揚す。あゝ、偉なるかな、尚中興以後の世代、左の如し、但し法名下の年月日は其遷化日なり。

第一世　照範　享保九年十月十九日
第二世　快盛　享保十二年九月廿二日
第三世　照朝　寛延二年六月十八日
第四世　照諦　寛延二年二月四日
第五世　照峰　天明一年三月一日
第六世　照乗　文化六年二月二日
第七世　照譽　文政四年十月十九日
第八世　照胤　文政十二年七月十六日
第九世　照融　天保十五年十一月七日
第十世　照阿　文久二年八月五日
第十一世　照嶽　明治二年九月廿二日
第十二世　照順　文久元年六月八日
第十三世　照輪　明治十五年十二月廿九日
第十四世　照鳳　明治廿九年六月三日
第十五世　照勤　現在

山内山外

只見れば山東西に蜿蜒し、蒼松老杉鬱然として天を衝くところ、寺域三萬餘坪、幽寂ふが如くにして纖塵を留めず、巍峨たる伽藍、深林の間に隱見し、瞬間たる層塔、爛として日光に輝く、況んやまた行香の士女、絡繹として織るが如く、幢を飜し、螺を吹くの講社團の如くに寄せ來る。こゝぞ關東第一の靈場成田山也。一歩、境内に入る、橋に石垣に、戒石に、曰く何々講、曰く誰人と、眼に觸るゝもの、悉く是信徒の寄附奉納に係らざるなく、天水鉢や、燈籠や、數限りなく整然として

道の兩側に並び建つ。

仁王門　御手洗水に口嗽き、手を淨めつゝ、磴道を登れば、即ち仁王門にして、高六十三尺、七間半に十間半の大結構にして、正面「成田山」の額は、奈良東大寺別當榮華嚴宗長者安井門跡道恕大僧正の筆、周圍にある竹林七賢人と司馬溫公、瓶藏りの彫刻物は、後藤龜之介の刀に成る。門の左右には仁王尊の尊像、門の後面には、多聞廣目の二天を安置す。用材は玉水目美はしき總欅にして、文化元年照譽上人始めて建立せられ、今のは天保二年照融上人の代の再建に係る。尚、仁王尊は、何人の作なるかを詳かにせずと雖も、威容儼として犯す可からず、且つ奇しき一傳說あり、曾て天正の頃、隣邑寺臺驛に千葉家の武士、海保三吉なる人住ひけるが、一日仁王尊を拜して曰く、二尊白水にて汚し、我、朱眼を奉らん願くは、汝に膂力を授け給へと、乃ち朱を振り掛けて歸る、夜に入りて人形塚まで來るに、暗中大漢子の道を遮るあり、海保氏怒りて之と引組み、忽ち路傍の水田に投ぐ、時に松上聲あり、曰く我は是れ仁王なり、汝の願に任せて敵一倍の力を授くと、氏是より名を遠近に馳す、依りて田園を寄附して二尊の德を謝し、爾來、朱振の仁王尊と稱し、海保氏寄附の地を二王面と云ふと。

燈明臺　仁王門の右側に在り、石工燈明講中の奉

納するところ、悉く石を以て疊み、上部の燈臺は、四面皆銅及び鐵を用ゐ、硝子戸を鉸む、高さ六十餘尺。

仁王池　仁王門を入りて進めば、碧水を湛へたる小池あり、池中には數多の龜子游泳し、時に巖上に甲を曝らす、俗に仁王池と稱す。

寂水石橋　仁王池に架するところ、その色澤純白にして麗はし。

こわれ不動　寂水石橋を渡れば、左右皆奇岩怪石を以て斷崖を爲す、所左の小石磴十數級にしてこわれ不動あり、精巧を極めたる小堂なり、幾たび修覆するも、忽ちにして破るゝを以て其名ありと聞けど、現在のものは明治三十三年の造營にして、四圍に金網を張りなどして破壞の防止に備ふ。

本堂　石階を上り盡せば、丘陵の中段に、高さ六十八尺、十四間四面結構宏壯、翰奐莊麗、銅瓦雲に聳え、金鈴風に吟じ、儼として半空に峙つもの、卽ち是れ本尊不動明王を安置し奉る所の本堂なり、堂は安政四年照嶽上人によりて再建せられ、同五年八月六日より十日に至りて落慶式を擧げ、十一日遷座式、十二日入佛供養を爲せるもの、番匠は八木紋次郎なりしといふ、正面須彌壇上は卽ち本尊不動明王の御座にして左右には矜迦羅、制多迦の二童子立てり、別段の右には降三世軍荼利、左には大威德、金剛藥叉の四明王を安置し、左の扁額は、北白川能久親王御親筆の「成田山」の三字を題す、また外陣天井の龍及び左右の天人、並に裏堂の釋迦、文殊、普賢四天、十六羅漢は、共に法橋狩野一信の筆に成る、堂の構造は總欅にして、周圍に施せる精巧緻密なる五百羅漢は狩野一信の圖案、松本法橋良山の刻彫なる二十四孝は、島村圓徹の作、御拜所其他の彫物は、長谷川權の守の刻にして、俱に苦心の跡歴々看取す可く、當代の傑作と稱せらる、而して朝護摩、大護摩、平護摩等、夜明け前より日沒に至るまで、護摩の煙の絶ゆる隙なく、遠近の信徒、群參の男女常に堂の內外に溢れ、護摩札を受くるもの、御籤を撰るもの、御百度を踏むもの、合掌跪拜するもの、晝夜間斷する時あらず、また以て本尊の威德廣大にして、靈德の顯著なる推して知る可く、信者の多く、篤者の盛んなる、東國絶えて其比を見ざる所也。

三重塔　本堂と相並びて、巍然雲表に峙つもの、卽ち是れ五智三重の寶塔なり、塔は正德二年中興照範上人靈夢に感じて造立する所、其後享和三年九月廿四日、中興第七世照譽上人によりて再建せられたるもの、卽ち今の塔なりとす、高さ九十餘尺、五間四面の建造にして、結構堅牢、色彩優麗、周圍に刻める十六羅漢は、島村圓徹の刀なり、また得難き美術工藝上の好參考品と稱せらる。

■鐘楼　三重塔の前に在り、高さ六十尺四間四面の結構にして寶永三年照範上人の造るところ、當山建造物中、年處を經たるものゝ一に屬す、樓上の五鐘は慶應三年に於て再鑄せる所のものなり。

■開山堂　鐘樓の左の方に當り、一切經藏の右に在り、開山寛朝大僧正の木像を安ず、今の堂宇は明治二十一年四月改造せられ、其後更に修理を加へられたるものなりと云ふ。

■一切經藏　開山堂の左側に在り、享保八年三月照範上人最終の事業として經營せらるゝ所、その後、文化六年照譽上人の時代に再建せられたるもの、則ち現輪藏なり。一切經全部を藏め、中央の經函は回轉式に成る、正面『一切經藏』の扁額は、白河樂翁公が眷て當山に參籠せられたる際の揮毫に係る。

■額堂　一切經藏の左側に在り、間口九間奥行五間の構造にて、是れ名優七代目市川團十郎が文政四年五月に營造寄進したるもの、中央の柱に優なる假名書きにて『せったい所　七代目團十郎』と題せる自筆の招牌を掲ぐ、傳へいふ、水野越州勤儉政策を執れる當時驕奢に過ぎたりとて江戸稍に遭ふて當山に鑽慣中、明王の威德に感じて群參する信徒の勞を慰むべく、日夕此處に在りて茶の接待をなせるなりきと、尙堂内には、團十郎が社杆奏の石像を存置す、その他、堂の一隅に幾百尋の長き、徑二寸餘の毛綱あり、幾萬の善男善女が、一筋を千筋と惜める黑髮を斷ちて獻げ奉りしを、普請の折に用ゐたるものとぞ、將た明治二十二年八月二十二日のこと、その昔開山寛朝大僧正が本尊を奉じて、海路遙かに初めて着岸せりきといふ匝瑳郡白濱村字尾垂の沖合に於て、漁夫岩澤清太郎が、不動尊の加護によりて海底より引揚げたりといふ最と古き大錠も在り、之に關する諺曲『碇引』さへ新に作られて傳唱せらる、更に堂の内外は無數の奉納額層々相重なりて、多種多樣、亦一奇觀也。

■護摩木藏　額堂の左側女厠の登り口に在り、日々本堂に於て護摩法を修する際使用する護摩水を納むる所とす、その護摩水は、大小長短の二種ありて各、法に準ず、之を作るには、數百町歩に亘る護摩水山より良材を選み、齋戒沐浴その製作に從ふといふ。

■御供所　本堂の右方、三重塔との間に在り、本尊に奉る供物を調ふる所にして、今その一半を分ちて守札、御影、御鑁等を陪與する所とす、尙傍らに御供水ありたれど、今は他に新井を穿ちて供養に充て、只、その跡を留むるのみ。

■朝日觀音　本堂の左側に在り。

■天滿宮　同じく朝日觀音と隣して建つ、最も由緒あるものゝよしにて、元祿七年の石燈籠壹對尙存す

るを見る。

■三社　白山金毘羅、今宮の三社にして、本堂左側の礎道を光明堂に上る左方に在り。

■三十六童子　本堂の背後崔嵬たる巖石の間に三十六童子の銅像並び建つ。

■五大明王　また役の行者像及び三十六童子に隣接の行者像　三十六童子の相並べる一角巖窟の裡に在り。

りして立つ。

■八大童子　五大明王と相接し、女阪の石階の左側に在り。

■兩童子像　同じく女阪石階の右方に立つ。

■利劍及兩童子　女阪を登り詰めて廣庭に立てば、その一角、巨砲巨彈を巧みにあしらひ、更に飾るに聯隊旗その他の鎧物を以てせる間、聳ゆる所の高塔に置くに、中央利劍を以てして且つ左右に兩童子の鎧像を配す。砲兵工廠有志の寄進に係る。

■清瀧堂　光明堂裏なる奥の院の右に在り、清瀧權現と、地主妙見とを合祀するところ、享保十七年の再建に係り、正德二年に刻まれたる古樸なる高麗狗狗社頭に存するを見る。

■光明堂　當山最高の丘上廣濶なる境内の中央に建てられあり、大日如來を安置す、即ち是れ中興照範上人が元祿十四年に造立せられたる舊本堂にして、安政四年新に現本堂を造營するに際し、此に移したるものなり、堂は高さ五十餘尺、十一間四面の總朱塗にして、結構莊麗、また當山堂宇中の一美觀たり、藏むるところ、谷文晁の舞樂及奔馬の圖、亀田鵬齋の『成田山』の額、その他優秀の扁額、古面等多し。

■聖德太子像　巨大なる木像にして、今、光明堂内に安置せらる。

■奥の院　光明堂の正後、切石を疊める洞窟の奥微かに孤燈の幽寂なるを認むるもの、是れ即ち成田山奥の院にして、本地大日如來を安置す、洞窟外石垣の間に十數枚の板碑を見るも、其多くは磨滅して讀むべからず、中に就て延元の碑、明德の碑、寛文の碑、稍々讀むべし、即ち延元の碑の正面上部には、精巧なる天蓋瑤珞あり、其下に彌陀の種子なる梵文の枳利倶字あり、梵字を戴くに遮華蓋を以てし、臺下の左右に觀音勢至の種子なる梵文の娑索の二字あり、梵字を戴くに各遮華を以てす、而して三梵字共圓形を畫き、又娑索の下に各遮華を挿したる水瓶あり、以上は一緣を劃したる圓内に在り、圓外右方に『一念彌陀佛　即滅无量罪　現受無比樂　往生清淨土』左方に『若有善男子　造立卒都婆　其人之功德　佛智不可量』と五

言四句二十字づゝを刻し、下方に『右志者爲過去慈父道禪生靈百ヶ日忌辰奉訪彼亡魂仍出離生死往生極樂乃至法界平等利益也　延元元年丙子八月廿六日孝子敬白』の五十五字を刻せり。碑は幅員約三尺高さ約四尺、但し上下左右共切り詰めたる形跡見ゆ。明德の碑は、正面上部に天蓋あり、中央に彌陀の梵字あり、梵字の下に遊華蓋あり。右方に『右志趣者爲逆修善根契約人々等建立』左方に『自造之石塔願法七分全得功德乃至法界平等利益』下部に『明德五年甲戌　施主等敬白　八月彼岸』の文字あり。若し夫れ寛文の碑に至ては年代更に近し。案説するに及ばず。唯六百年前の古碑現に存す。文字以外意味餘かなるを覺ゆ。

額堂　光明堂の左に在り。間口十間半、奥行五間半、文久元年照嶽上人の代に建てられたる所にして節二額堂と稱す。堂の内外奉納額の掲げられあるもの、また夥しき數に上る。

吒枳尼天　光明堂より左折して花崗石を敷きたる坦道を西に行くと一町餘本坊の裏山老杉茂れる處に在り。山内守護人法繁昌の爲に勸請する所なり。諸藏人花柳界に信仰者頗る多し。俗に出世稲荷と呼ぶもの是れなり。

藥師堂　仲ノ町と上町との間急坂下り口の左方の丘上に在り。是は明暦元年建立の本堂にして、現存建物中最古に屬するものなり。元祿再興の際、今の光明堂の所に移し、更に安政年中、現本堂造立の節、此所に移して藥師堂と爲す。元祿の本堂即ち今の光明堂を奥の院前に轉じたるものなれば、歴史上よりすれば、現在の本堂の二代以前の本堂は、即ちこの藥師堂なりしも也。

弁財天堂　歩を還して再び仁王門下境内に戻るに、西隅に小池あり。池心の小嶼に石橋を架し、弁財天を祀る。堂は中興照範上人の造るところ、光明堂と其時代を同ふす。

御手洗水　仁王門下右側の一隅に在り

水行場　仁王門の右方三佛堂の前に在り。此邊小字を童子と稱し、井戸を童子ヶ井戸と呼べり。元禄童子を安置せる所なりといふ。堂は間口四間、奥行三間にして、別に脱衣室在り。場内には清冽なる水湧出し、井の傍に大なる水舶あり。篤信の人々、四時此處に水行を取り、特に寒三十日、冬り浴する者多し。道譽祐天等の大德も、藥嶺尊德等の偉人も、その昔皆この井戸の水を被りて本尊に新誓を凝らしき。殿冬月氷るの夜半赤裸々裸一着滑かに敷き詰めたる甃の上、蹲踞して數十桶の冷水を浴び慈救の咒を高唱しつゝ新願に餘念なき幾多の男女を見るに至て、凛乎殆ど人

界の業にあらざるを覺ふ。

■參籠堂　水行場の右側に在る三間半に九間半の建物は、即ち男子參籠堂にして、同じく水行場の對向に在る二間半に三間半のものは、女子參籠堂なり。篤信の人々こゝに參籠し、食を斷ちて願意祈願を凝むる所なり。その昔道譽上人、祐天上人のことは、各々その傳記に委しく、白河樂翁公も、之を敬してして、且つその折、一切經藏の扁額の揮毫まで有りき。若夫れ、二宮尊德翁の參籠斷食して、上君意を安んじ、下百姓を救はんことを祈誓したる事實に至ては、最も信憑す可き『報德記』能く之を詳かにす。尙、今日現に斷食參籠するもの、一年を通じて少くも六七百人に上ると。

■三佛堂　水行場の後に在り、九間に二間半の堂宇にして、正面に將軍地藏、左右に二十三夜勢至菩薩と二十六夜愛染明王とを祀る。

■阿彌陀堂　男子參籠堂の向側に在り、土地の老媼老翁打集ひ、滅罪生善の念佛を修行する所。

■歷代の墓所　新勝寺歷代の住職及び僧侶の墳塋は、男子參籠堂の後に在り。

■新勝寺　成田山神護新勝寺は、新義眞言宗智山派の別格本山にして、成田山不動明王に關する一切の法務を司る。寺は極めて廣濶にして、客殿、奥殿、內佛殿

は言ふも更なり、庫裡に、其他に、各部各室整然と區劃せられ、僧俗三百以上の人々、各々其職責に任じて有らゆる法務俗務を處理す。

■客殿　表門を入りて、正面に猶ゆる巍然たる建物は、即ち當山の客殿にして、棟上の金紋燦として輝く。內は數十室に分たる可く、三百餘疊を敷くに足る。大護摩修行の者及び參拜信徒の坊入を希望するものは、皆此客殿にて饗應せらる。每年春秋の二季及び正五九月等には、日として幾百千溢るゝばかりの坊入を見ざるなく、掛りの者は目の廻る程の忙がしさ、その盛んなる驚くに堪へたり。

■應接所　客殿の右に當る十疊ばかりの一室、是れ貴主石川大僧正の應接所なり。間卓一基、椅子五六脚、欄間に先師照圓上人の肖像外、二三の扁額あり。書函上には古佛像寫眞、塑像等の陳列せらるゝを觀る。室中、唯一の誇は、僧正が曾て歐米漫遊中、到る所にて渉獵せられたる日本に關する數十册の圖書あるのみ。內、自ら薄うして勤行最も嚴、外汎く衆を愛して慈善公益に總てを吝む無し。聽此餘りに質素なる應接所こそ、僧正の崇高純潔慈仁なる性格の反映なれ。

■奥殿　客殿より廊下を傳ふて內佛殿に至る左側の室をいふ。明治十四年及び十五年の兩度、明治天皇陛下、三里塚御料牧場へ行幸あらせ給ひける折畏く

も行在所と定められ玉座に充て給ひて、時の住職に特に拜謁を仰付けられ且つ金品の恩賜ありし光榮ある室にして自ら清酒莊重神氣超然たるを覺ふ。

■内佛殿　奥殿の控室を過ぎて様側傳ひ瀟洒たる中庭を隔てゝ内佛殿あり正面には扉子入り伽羅の本尊明王を安置し、左右には、弘法大師御作の浪切不動、三面大黒天を祀る。特に一段高きところには畏くも　兩陛下、皇太子殿下を初め奉り、皇女皇孫各殿下の御誕生日を記し、毎朝山主僧正親ら虔みて皇祚の無窮と、玉體の安穩とを祈り奉り、併せて國家安寧萬民豐樂を懇禱するを例とせらる。

■四脚門　奥殿の前庭に樹つ此四脚門は、往時左大臣以上にあらざれば建つることを許されざりしものといふ。是は明治天皇陛下御在世の砌久しく御座所近き内庭に建て置かせられたるを御生母中山一位の局が邸を青山に賜はりし際、特に局に御下賜ありて青山に移されけるが、明治四十年の夏局には野州鹽原温泉に在らせらるゝ中、突然に此門を急ぎ成田山に寄附すべき旨電命あり、谷扶の者は取敢へず御命を奉じて當山へ寄贈せらる。當山に於ても此門の由緒と、御志の難有さを拜し、直ちに組立に着手したるに、工事稍々成るの日を以て局逝去の訃音に接し、一種の御遺物となり畢んぬ。

■方丈　方丈は、山主僧正の居間の總稱にして居室、書齋、次の間、更衣室より成る。左れど、實際常住の間は唯是れもまた餘りの質素に驚かるゝばかりなる十二疊半の一室あるのみ、夫れさへ身邊群書山積、他の室に至ては更に悉く一大書庫と稱するも可なり。斯くて僧正には、朝護摩、大護摩、來客應接の外は常に端然百般の事務を處理せられ讀書も、食事も就褥も、亦皆此處に於てせらる。堂々成田山の貫首を以てして、この簡捷平易、奥床しき極みにぞある。

■内庭　奇巖怪石重疊せる所松あり、梅あり、櫻あり七色咲の躑躅花に、不動捻りの百日紅に、さては池の汀に紅蓮白蓮のなよやかなる、噴水の下に金魚の泡沫を遥ふて戯るゝなど、取り〳〵の景致總べて是れ絶佳の二字に盡く。

■庫裡　新勝寺の諸機關は、大略此庫裡内に分割せらる。執事部、家政、學課、役僧寮、徒弟寮、收納方、納戸方、勘定所、廣間、侍部屋、料理所、臺所、下部屋等なりとす。作事方、百姓部屋は、別に置く。就中、幾百萬と數知れぬ諸種の御守札は、夫々分擔ありて製作さるゝことなるがその迅速、巧妙目を驚かすものあり、且つ日々數百乃至數千の坊入其他に雲應する料理所の忙がしさ、少しく坊入の多き時は、神酒のみにても一日に四斗入十數樽を傾け盡すとありとは、盛大愈々想ふべし。

■護摩受附所　通用門を入りて正面に在り。

■ね上り阪　護摩受附所前を本堂に上る石磴僧正以下、本堂に於ける勤行にはこゝを往還せらる。

■大師堂　客殿より渡り廊下を越えたる殿堂は即ち大師堂にして、正面は宗祖弘法大師、右方は小野流の祖、聖寶理源大師、左方は新義派の祖覺鑁興教大師を併祀し、その又左右兩壇は、先師及び有緣の靈牌並に篤信者の日月牌の靈位を置き、朝夕讀經回香、香華飲食の供養懇ろなり。堂は總欅造り八間半四面にして、明治二十一年先代照鳳僧正の再建に係り、欄間其他の彫刻は都て後藤敬信の名刀に成る。堂內には曾つて池田照譽僧正が印度に留學中、佛祖の舊跡靈地を巡拜して蒐集し歸れる數多の紀念品を備へ、堂裏には日清、日露の戰役中、本尊の靈驗に感じて幾多の將卒の寄附奉納せる數千點の紀念品を陳列して、其に乘庶の縱覽を許せり。

■聖天堂　大師堂の左側に在り。人法繁昌の爲め大聖歡喜天を祀り、毎月初七日間浴油供を修行す。

■延命院趾　延命院の名は、横濱野毛山に移され、淮別格本山として本派有數の寺院となれり。左れど其境內及び建物は今尙依然として存在し、現に院內徒弟の學問所たり。本院は、曾て七代目海老藏が江戸御搭中、本人の情願によりて數年間隱棲したる所也。

■花園　光明堂より右に折れて數十歩すれば花園の入口に達すべし。その入口の一區は梅園にして、老樹數百株、龍跳り雪飜る。梅園の盡くるところ、藤あり、杜若あり、これを過ぐれば櫻山に至る。千枝萬朶霞を罩め、雲を鎖し、殆ど其美に醉はしむ。更に進めば、地愈々潤く、景最も佳、後の谷間には、丹頂松上に唳き、白鷺清池に啄む。而して、此處彼處、古松老杉の龍蹲り虎踞き、巨幹高く天を摩し、垂條低く綠を滴らすあり。春に宜く、秋に宜く、四時折々の眺めの麗かさ、眞に天與の一大樂園たり。

■望洋閣　花園を入りたる右方の崖上に在り。花晨月夕、眺望第一なり。

■華骨亭　望洋閣の彼方百歩許に在る四阿にして、同じく開放して遊覽者の憩ふに任す。

■照輪上人銅碑　花園の中程に在り。上人は近來の碩德寺務倥偬多艱を極むるの時運まれて貫主の職を襲ぎ、經營最も努めて頹瀾を既倒に回す。碑は其德業を頌して詳なり。

■園十郎と園藏の銅像　同じく花園內に、七代目市川團十郎及び六代目市川團藏の銅像あり。

■物產館　光明堂の後方遙に廣濶なる平地の一隅、奈良朝式建造物の巍然として、玉尾雲を磨するが如

くに峠つあり即ち物産陳列館にして主として縣下の物産を陳列し殖産の奬勵を圖る。

■訓盲濟衆學院　本院は憫む可き盲人の救濟教化を以て任するもの成田圓書館主任高津親義氏これが院長たり明治三十九年成田鍼按術研究會の昔より今私立學校令に據りて經營する清聚學院まで、さに十有九年成田山主石川僧正の大悲の手を以て陰に陽に援護せられたると、院長の熱誠有志の義俠相俟つて能く今日に至り大正五年新校舍を設け同六年三月學校としての第一回卒業生を出し、孜々として其經營に努む、院は佐原街道の一角に在り。

寶物

成田山に於ける寶物什器の貴重品は數千點の多きに上りて、一々これを說くの詳なる能はず、唯こゝに其一二を擧ぐるに止めん。

■天國の寶劍　是ぞ當山第一の靈寶にして文武天皇の御宇大和國の住人大原左衞門尉藤原天國に命じて作らしめ給ふ所歷代の天皇常に玉座の側に置かせ給ひしを朱雀天皇の御宇將門追討の時寬朝僧正に賜ふ所なりといふ天國は我國鍛工の祖にして、そが勅命に依り精神を凝らして鍛ひ上げたる名劍、本尊明王の威靈と相俟つて、茲に不可思議の奇特あり尊むべし、畏るべし。

■酒醉天神　菅原道眞公謫せられて筑紫に在り、遙々自ら其像を畫き、是を伯母覺壽尼に贈らる、伯母君は公の謫居を痛く嘆かれ、畫像の前に神酒を供へて無事平穩を願り居られしに、奇しくも像の面に淡紅色を呈し、恰も酒に醉えるに似たり、是によりて酒醉天神の稱ありと云ふ、當山の傳來は今詳ならざれど、公は寬朝大僧正の祖父たる字多天皇の信任拔擢を蒙りし人なることは、普ねく世の知る所なり、推するに、宇多天皇の御孫にして當山の開基たる寬朝僧正と、天皇の知遇を受けたる菅公と、其間何等かの消息あるものゝ如し。

■濱切不動像　內佛殿內に安置す、傳に曰く、弘法大師渡唐の時、海上風波の難に遭ひ、船將に轉覆せんとす、時に不動尊海上に出現し給ひ智劍を揮つて浪を切るを見る、曾らくして風靜まり波和らぎ、恙なく彼國に着するを得たり、依りて大師この靈驗に感じ、其船の櫂を取り、自ら其觀像なりと。此尊像なりと。

■不動の古面　初代出目の作にして、其傳に曰く、建武二年十一月鎌倉中惡疫流行し、將軍足利尊氏また

侵さる。一日親世太夫を召して舞を爲さしむ。太夫乃ち新曲金剛を作りて其形を不動明王に取り、此面を以て一曲を舞ふ。尊氏の病苦、頓に癒ゆ。この面觀世家より俳優市川家に傳はり、文化十四年五月廿八日、七代目市川團十郎よりして子孫繁昌の爲、更に當山へ奉納せるなりと。

■千體不動尊　弘法大師の眞筆にして、古色蒼然、一見磨滅せるが如くなれど、仔細に之を觀れば、尊容儼として有繋に筆力非凡なるを見る。

■智證大師眞筆　また智證大師眞筆の不動明王並に兩童子及び倶利迦羅藏王の圖あり、同じく古色の殆ど辨じ難きほどなれど、逸品疑ふべからず。

■加茂冠者の鎧　加茂冠者義次は六條判官爲義の十二男にして八郎爲朝の弟なり。淡路に戰死すといふ、八百年に近き時代の遺品として處々破損せりと雖も古色甚だ愛すべし。

■圓光大師不焚の名號　淨土宗の開祖黑谷の源空上人法然房の眞蹟と稱す。正面に六字の名號、下に源空として書判あり。左に『只タ賴メヨロッノ罪ヲ深クトモ』右に『ワカ本願ノアラン限リハ』と書せるもの、四周皆燒切れて、唯名號の所のみ殘れり。不焚の名號の稱ある所以なり。

■道譽上人眞筆名號　丈一尺九寸一分、幅四寸一分、

草體にて六字の名號と、下に道譽として書判あり。

■祐天上人百萬遍　百萬遍名號は、高さ一尺八寸七分、幅五寸五分の五輪塔を頗る細密なる名號を以て書寫せるなり。正面に『南無極樂世界阿彌陀佛（遍華）念佛』以上は尖塔即ち寶輪部に在り、以下一重毎に一字づゝ『南無阿彌陀』と書し、最下の臺座に『佛　祐天（書判）』あり。尙同所橫行に『願以此功德平等施一切同發菩提心往生安樂國』の四句二十字の偈あり。尙この外祐天の御名號と傳へらるゝもの數幅及び、同上人百萬遍の念珠と稱するものもあり。

■藤原秀郷の陣刀　藤原秀卿の陣刀なりとて、頗る長大なるもの有り。

■恩賜の七條　明治天皇陛下行幸に際し、行在所に充て給ひし折畳多くも御下賜あらせられたる最も光榮ある品なり。

■今上陛下御產衣　今上陛下の御產衣もまた容易に拜し得ざる寶物にして、御幼時御手習の御手本御覽と共に秘藏せらる。

若夫れ、書畫類にありては、古法帖は勿論、文天祥瑞圖、王徽登巨勢金岡兆殿司等より、中世の周文雪舟元信、探幽吃又、近代の文晁若冲、大雅堂山陽、范一椿山雅邦、玉章、巢亭、其他貴顯、高僧、學者、文人に至る、實に幾千點なるを知る可からず。殊に、佛壇曼荼羅等に貴重品の

多きは固より其所とす、又佛像佛具樂器骨董能面等の珍什奇品も尠からず、今繁を恐れて一々これを擧ぐるに及ばざるなり、但し其中の或者は收めて寫眞版中に在り。

成田山年中行事

年中行事の詳細を說くは容易に非ず、こゝには唯その大略を叙述する所あらん。

■朝護摩　一年三百六十五日を通じて毎朝晩爽に撞き出す鐘と共に貫主僧正を第一着に執事以下一山の大衆悉く上堂、貫主は不動法及び護摩供の法を修し、大衆は法樂を捧げ必ず各人毎の祈念牌を以て貫主僧正自ら一人々々に祈念を凝らさる――但し一ケ年中朝護摩に二回の異例あり、一は七月十四日にして一山の大衆盂蘭盆の棚經に總檀徒を廻るが故に法樂を略すると一回次に十二月十三日は夜半より煤掃及び御身拭を行ふが故に貫主の護摩修行を略することなり。

■夕護摩　毎月二十七日午後四時朝護摩同樣の式を以てこれを修行す。

■平護摩　毎日午前九時、同十一時、午後一時、同三時の四回、役僧上堂して護摩修行を爲す。俗にこれを平護摩と稱せり。

■當病護摩　當病護摩の願出ありたる時は晝夜を問はず、時間を論せず、直ちに修行するを例とす。

■大護摩　大護摩は、講中信徒等の志願により隨時修行するものとす、其儀式は略々朝護摩に同じ、正五九及び四月十月に於ては講中信徒の登山者多ければ、日々五六座より多きは十座二十座に及ぶ。

■御手長　當山に於ける御手長は、普通大護摩を禁き、豫め百味の供養品を調へ置き、護摩修行中參拜の講員全體にて、御供所より本尊の御前まで順次手送りにして奉獻し、護摩畢りて復た元の如く撤回す、而して別に餅錢等を多數の叺に盛り、鐘樓三重塔等に備置き、一般參詣の群集に授與するものにて、講中信徒の希望によりて執行するものなり。

■十箇座十萬遍　大抵約三日に亘り、護摩修行十座法樂中大木魚を叩き、本尊の呪を唱ふること十萬遍結願の一座は大護摩を修行するなり、同じく講中信徒の志願によりて之を行ふ。

■大般若經轉讀　一月五月九月の初八日を以て鎭守清瀧權現の寶前に於て執行す、又講中信徒の願により、本堂に於て大護摩の法樂に大般若經を轉讀することあり。

■天尊浴油　毎月盡日の初夜より一七日間、聖天堂

に於て山内安全、人法繁昌の爲め、行者承仕等其法器を撰んで最も嚴肅に浴油供を勤修せしむ。

■朝禮　正、五、九の三ケ月は、一日、十五日、廿八日の三日、其他の月は、毎月一日の朝、山内詰合僧俗一同、山主僧正に謁して賀詞を述べ、夫れより執事以下各部家を廻禮す。

以上は一年に通せるもの及び無定期のものを擧ぐ。

以下は特種定期のものなり。

■元朝年賀式　一月元朝、朝禮摩常の如し、雜煮畢りて貫首僧正は一山の大衆を率ゐて、特に一月に限り客殿に祭祀せる酒醉天神其他の祭壇に、一々法樂あり、右畢りて直ちに客殿大廣間設けの席に就かれ、大衆以下詰合員の所謂御目見へ以上のもの總出仕、一同拜賀、順次冷酒の杯を賜はり、其中頃より屠蘇の盃を廻らして式を畢る。夫れより、貫首は同席に於て更に成田町の年賀を受けらる。

■年頭廻禮　一月三日午後二三時頃より、貫首僧正は成田町内の年賀を勤めらる。朱塗長棒の鶏籠にて執事以下役僧侍者從者、挾箱、長柄、草履取、杖持、先觸跡押等扈從す。斯くて成田町表通りを一巡せられ、先觸によりて表通り各戸の主人若くは主婦は、戸前に出で、蹲踞して敬禮を表すること、最も嚴肅なり。此一事、今に及んで尚舊幕時代の俤を存するもの、獨り之を成田に於て觀る。

■新年宴會　一月五日、山内詰合の殆ど全部を網羅せる交道會によつて、夜、新年宴會を開かる。

■七草の御判　一月七日早朝より、地方のものは頭痛除と稱して、本尊の梵字を刻したる御判を額若くは帽子等に捺し、守符と爲すの例あり。

■節分會　平年二月四日即ち立春の前夜を以て擧行す。此節分會は、所謂『成田の豆まき』と稱して獨萬の群衆雜踏する頗る有名のものなり。其次第は先づ（一）午後八時前後院内豆まきあり、即ち大書院の般若十六善神を奉祀せる前に於て、山主僧正を始め執事以下山内總出仕、般若心經三百六十五卷（一年の日數に當る）を讀誦す。其中間に於て院内年男、麻社祢にて炒豆を盛りたる桝を執り、役僧案内に立ち、本坊御祈堂、内佛殿、奥殿、方丈、庫裡等各室毎に『福は内』と高唱しつゝ撒豆三回（二）撒豆後院内僧俗詰合一同山主僧正に大年の御禮の式あり（三）一番鐘（午後約十時）にて當年の年男は坊入の準備を整へ、又豆撒の盛觀を拜せんと欲する信徒は本堂内に入る（四）二番鐘（午後約十二時）にて年男は豫め本坊設けの控所に入り、禮服社祢着用、奥殿上の間にて山主僧正と對顏挨拶あり、雜煮餅の吸物にて神酒の式を擧げ、年男一同へ山主より白扇一對宛を賜はる（五）衆僧及樂人等は二番鐘より

徐々入堂して三番鐘を待ち(六三番鐘翌午後約二時)にて年男一同は漸次本堂裏口より入堂最後に山主僧正は多數の從者に圍まれて入堂伶人樂を奏し衆僧法樂を捧げ山主は直ちに護摩壇に進みて不動法及護摩供を修せらる護摩の本尊段に入るや執事は三拜して起ち、豫め本尊明王の御前に供へある桝を執り年男一同に與へて撒布せしむ年男は桝を受けて『福は内』と高唱しつゝ先づ本尊に向つて三度、次に堂内參籠の群集に向つて數回これと同時に役僧中選まれある十數名は白單衣に襷を綾取り、一斗入の袋に炒豆と餡守三百六十枚づゝを盛りたるを首に掛け堂の四隅の天井に豫め足場を構へ置き、一ヶ所に二三人づゝ之に登りて、堂内堂外の群衆に向つて一齊に撒布し、右畢りて山主以下漸次退出す、式の全く終るは稍々四時に近き頃なり。

■星供　節分の夜を以て修行す、上は山主より下詰合員の家族に至るまで悉皆其年齢を記載せる帳簿ありて、特設せる星供壇に於て一ヶ年間の七難を攘ひ、七福を生ずべく祈願す。

■釋尊涅槃會　二月十五日涅槃像を飾り涅槃講式常の如し。

■出世稻荷祭典　二月第二の午の日、前日より當日に亘りて二日間挙行し、法樂を捧げ、火防の御守を配與するが例なり。

■高祖大師正御影供　三月廿一日を以て執行す、大法要等常の如し。

■花見踊　四月三日、是は必ずしも成田山の行事にあらざれども、祇園會と離れざる關係あり、此花見踊當番の町内が即ち祇園會の當番にして、只相違する所は、祇園の神輿番は男子之を勤め花見踊は女子之を勤むるのみ。

■灌佛會　四月八日、花御堂甘茶等是亦常の如し。

■先師照鳳忌　六月三日、先師照鳳忌は三日、先々師默堂忌は二十九日なれば、毎月此兩日には山主の居間に肖像を奉安し、兩先師の最も嗜好物たる蒟蒻の馳走にて、生前緣故の深かりし人々を招ぎて内宴を開く、而して其祥月命日に於ては嚴格なる法要を執行せらるゝなり。

■開山忌　六月十二日開山寛朝大僧正の忌辰にして、大法會を執行せられ町内重立檀徒總代各町世話人等參拜饗應あり。

■祇園會　七月七日、八日、九日祇園會は成田山奥の院大日如來の祭典にして、成田全町に亘る大祭なり。神輿の渡御、天國寶劍の參拜、奥の院の開扉等莊嚴殷盛を極め群衆雜踏比ひなし。

■盂蘭盆會　七月七日より普通一般、左したる變る

ところなし。

■無學忌　八月廿八日、前執事服部照和僧正の忌日なり。僧正生前の偉功により、現山主より特に一代の先師に準ずるの恩命あり。この日を以て大法會を執行せらる。

■菊華壇　十月廿八日より開壇、今や頗る有名のものとなれり。六七十年以前各地方の愛菊家が、自栽の菊を本尊に捧ぐべく持來りて壇内へ栽えつけしが始まりにて、その後一時中絶したるを十數年前より再興す。花壇は、山上山下に掛けて眩ゆきばかりに設けられ、美しさ言はん方なし。

■獸堂忌　十一月廿九日、先々代原口照輪上人の命日にて、大法會あり。

■覺鑁講　十二月十二日、眞言宗新義派の開祖密嚴上人興教大師の御忌なり。其法會は略々正御影供の如し。唯一事、豆腐の田樂燒を供するを異例とす。

■年末禊　禊は役僧長三寶に御幣を戴せ、勅定所重役案内に立ち、山内諸建物は勿論間毎々々を廻りて一年中に殖えたる災害の種を攘ひ、新なる福祉を來すべく禊淨するなり。又此夜歲末御禮として、詰合一同山主に拜謁して福茶を賜はるを例とす。

■破壇及作壇法　十二月三十一日夜、破壇法を修し直ちに翌元朝を以て作壇及神供の法を修す。故に本山に於ては元旦の零時より十二月盡日まで常護摩を修行するものなり。

成田山五大事業

昔者、推古天皇の二年佛教公認以後、聖德太子に依りて佛寺を建立せらる。今の大阪四天王寺是れなり。四天王寺とは即ち施藥院療病院悲田院敬田院の總稱にして、其名の如く初めの三者は、皆是れ慈善救濟の事業に外ならず。其後饑饉天皇の弘仁十四年、九條東寺を弘法大師に賜はるや、大師は其東方閑雅の地を撰みて綜藝種智院を設け、專ら九經三史等、當時の普通教育に貢献せられたり。其他、大師一代の行業は悉く濟世利民の本願を出でざりき。我國に於ける大乘佛教の眞髓は實に斯の如くにして、誦經禮拜念佛等儀等にのみ沒頭せらるべきものに非らざりしを知る可きなり。成田山貫主石川照勤僧正玆に見る所あり。所謂成田山五大事業を興して專ら社會的事業に努力せらる。恰も創立當時の四天王寺綜藝種智院を更に現代的に擴大せるものと謂つ可き歟。斯の如くにして勅めて大乘佛教の眞價は愈々發揮せられ、本尊明王の威德は益々光被せらる可けん。

■私立成田中學校　時勢の進運に伴ふ教育施設に於て、中等教育の最も必須なるを感じ、明治二十一年八月中、新勝寺先代の住職三池照鳳師は、地方有志と謀りて成田英漢義塾なるものを創立せられたり、明治廿七年、石川僧正住職たるに及び、其遺志を繼承して、專ら育英事業に熱中せられ、明治三十年に至り、新に位置を選みて、且つ校舎を起し、明治三十一年七月僧正は適々在歐中なりしも、旨を院代に通じて、文部大臣に對つて中學校認可を稟請するところあり、同十月、認可を得て、私立成田中學校と稱するに至れり而して、爾來常に二百五十名内外の生徒を收容し、明治三十五年四月、中學校として始めて第一回の卒業生を出してより、既に凡て十九回、四百九十二名の卒業生を出し、成績優良を以て稱せらる。

■成田高等女學校　本校は、元私立成田山女學校と稱し、明治四十一年四月の創立に係り、明治四十四年二月、文部大臣の認可を得て、成田高等女學校と改稱す。是れまた所謂成田山五大事業の一にして、校主兼校長たる石川僧正の慈心の下に生々發達しつゝあるものなり、從來の校舍の外、同年十二月に於て、雨中體操場、理科教室及び普通教室等、何れも增築、其工を竣へ、設備到らざるなく、明治四十五年三月、高等女學校としての第一回卒業生を出してより、こゝに九回、

總員實に二百十六名、生徒、常に百五六十名を算す。

■私立成田幼稚園　本園は、明治三十八年五月の創立にして、石川僧正を園主、兼園長に推戴し、同六月一日より成田小學校の一部を借りて、保育事業を開始したり、創立の際は有志の寄附を以て其經費を支えたりしが、斯の如き姑息手段は到底永遠の計に非ず且つ一方には帝國曠古の大戰役たる日露戰爭も、稍々終局を認むるに至りければ、其戰捷かたゝ石川僧正は斷然意を決して、成田山の直轄事業と爲し、地を向臺の高所に卜して、園舍を新築し、明治卅九年三月功を竣へて、爾來常に百名以上の可憐なる幼兒を保育し、卒業式を擧ぐること既に十有五回、童五百四十三名に上る。建物に、遊園に、其他に、設備の到れり盡せる、稱に見る所なりと稱せらる

■成田山感化院　本院は、元千葉感化院と稱し、明治十九年五月廿四日の設立に係り、其當時は、千葉縣下各宗寺院の協力を以て維持の困難を感じ、遂に其懇請によりて、明治廿四年一月、新勝寺先代三池照鳳師、獨力を以て之を負擔せられ、直ちに院舍の新築に取掛り、同五月を以て落成したり、廿七年、石川僧正住職となるに及び、同院長の任務を繼承したるが、明治四十年、院舍再築と共に、監督經營上、これを成田山内に移すの便

宜なるを感じ、敷地を成田山上俗に茶畑と稱する所に擇び、四十一年三月廿五日落成發移轉式を執行したる而して、仁風慈雨此所に收容せざるべからざる少年を收容して、遂善感化に努めつゝあるなり。

圖私立成田圖書館　圖書館が社會教育機關として最も必要なることは、誰人も認めて異なきところ、左れど其經營には無限の資力と、非常の熱心とを以てするにあらざれば、到底その功を期すべからず、然るに、何の幸ぞ、石川僧正は元來讀書癖の人、讀書は實に僧正の生命なり、左れば、明治三十三年歐米漫遊より歸朝せらるゝや、直ちに圖書館の設立に着手せられ、三十四年二月設立認可、三十五年二月二日を以て開館したり、爾來こゝに殆ど二十年、幸にまた主任高津親義氏以下其人を得て、擴張又發展、本館に、書庫に、附屬建物に、能く備はり、最近の調査によれば、藏書實に約七萬冊、內和漢書六萬幾千、洋書三千數百、而して、佛書八千餘冊を藏し、外に容易に得難き珍籍を有する、地方圖書館中、稀に見る所、文教上の貢獻、特に稱へざる可からず。

あゝ、所謂成田山の五事業なるもの、實に斯の如し、一中學、一女學校、これを府縣の經營とするも、時に屢々難色あり、議論あらしむ、況んや圖書館をや、感化院をや、然るに、石川僧正その人の慈にして仁なる、既に業に、爲めに數十萬金を投じ盡し、且つ年々幾萬金を散じて其經營に勞し、更に有らゆる慈善公益の爲に力を盡さる、淨財を淨所に散ずること、能く斯の如きもの、天下また何くの處にか其人あらん、偉なるかな、その鴻德大業や。

石川大僧正

曙光曈曨、一氣清明、燈燭四邊に輝き、寥者跪拜する處、洪鐘畫樓に響き、梵音暗裏に起る、是れ即ち一月元旦より臘月盡日に至る、我成田山不動明王寶前に於ける每朝の光景なり、中に於て正しく明王に對し、紫衣の高僧端然と趺坐し、隱默に敬虔に、默々として護摩法を修するを見る、肩目清秀、溫乎として美玉の如く氣宇高邁、嚴乎として神人の如し、是れ吾石川貫首大僧正其人也、而して在職二十餘年、公用他行の外未だ曾て一日も貫首を護摩壇上に見ざることなし、其恪謹精勵、眞に不動明王の護持者と謂ふべし。

壯齡二十有六、關東第一の靈場、宗內唯一の肉山、此三者を對照して、既に其晋山が尋常水頭にあらざるを證明して餘りあり、此人格者、此哲人を傳するに、月並

的履歴書を採錄することは餘りに無價値なるの感に耐へず。成田山今日の隆昌と、五事業已下在職二十餘年間の公益事蹟とは、千萬人の俱に認むる所、それが其儘僧正の行業なれば、公的履歴は千萬人の等しく熟知せる筈、今更事新らしく記述の要なかるべし。然れども暫く世間並に倣ふて、其所謂履歴なるものを一瞥せん乎。

僧正は明治二年十月十日印旛郡瀧富村坂戸中村又十郎氏の二男に生れ、同十一年二月新勝寺先々代原口照輪和上の室に入り、初めて佛陀に事ふる身となれり。宗内の中學林、東京の哲學館（今日の東洋大學）新義派大學林等を卒へて、明治二十七年一月三十一日先代三池照鳳僧正の鑑識に因り、別格本山成田山新勝寺住職となられたるは、實に壯齢二十六歳の春、海外に遊學せられたるは、晋山後の明治三十一年三月初旬にして、米國滯留滿一年、其後歐洲各國を視察し、歸途印度の佛蹟を巡拜して歸朝せられたるは、三十三年四月末なりし。此滿二十五ヶ月間に於て深く僧正の心核に觸れたる所のもの何ぞ、蓋し僧正歸朝後の經營施設、是れ其結果也。

沙彌から長老になれず、僧正の俊秀と雖も、明治十九

年十八歳にして、教師試補を命ぜられ、累進權少僧正に補せられたるは、二十九年二十八歳の時なり。大正四年五月二十四日、最高位たる大僧正の現職に昇進せられたるは、實に四十七歳なりき。明治三十九年四月一日、日露戰役に於ける戰時奉公の功に由り、勳六等瑞寶章を賜はり、其他賞勵局及當該官憲より、金銀盃又は賞狀を下附せられたる百五十餘回重なる名譽職の肩書のみにても現に三十餘種を有せらる。

僧正の事業としては、所謂成田山五大事業と稱せらるゝ中學校、圖書館、高等女學校、幼稚園、感化院なることは、既に一般に知れ渡れる所なり。其他公私學校又は公益慈善等の事業にして、僧正の援助に俟つもの頗る多く、そは名譽職の肩書多きにても知らるべし。更に僧正の援助に依りて養成せられたる各種の學生は、明治四十一年までは簿記の證すべきものを缺き、今之を詳にする能はざれども、明治四十二年より十年間を以てしても、上は帝國大學より各種の專門學校に至る、實に百七十人の多數に達せり。亦以て如何に學事に熱心なるかを知るに足らん。

翻つて宗派問題に就て僧正の努力は、本是れ宗派に對する當然の義務と云はゝ謂ふべし。然れども其當

石川大僧正

然の義務を盡さゞる人の多き今日に於て僧正の如き護法愛宗家あることは、新義眞言宗智山派も亦多幸なる哉而して一面に新寺を建立せるもの二、廢寺を再興せるもの五、殿堂伽藍を再建せるもの五、人或は謂はん、成田山の實力を以てせば、斯の如きは易々たる業のみと、或は爾らん、然れども新寺建立、廢寺再興等は、信仰問題、道德問題にして、單に金錢の多寡にのみ由るものにあらず、古の高僧曾て大財囊を擁せしを聽かず、道德の力、信仰の力を以て之を成すにあらざれば、吾人は與せず。

（四十）

之を要するに、僧正は所謂人格の人なり、若し夫れ學者として、智者として、布敎家として、敎育家として、經綸家として、活動家として、著述家として、辯論家として、世に推稱せらるゝもの、人物寂莫の感ある今日の宗敎界と雖も、尙顧る其人に乏しからず、吾人は是等の數者を以て僧正を觀るものにあらず、僧正は以上の數者を兼有すれども、第一人者と稱せんは訣辭に過し、吾人の僧正に對して推服傾倒、現代宗敎界に於ける唯一人者、退て百歩を讓るも、後世稀に觀る高僧と爲す所以のものは、一に其高潔なる人格に在りて存す。（大正十二年七月石川大僧正に贈る）

成田山及び成田町

成田山の緣起や、沿革や、境內建物寶物など、或は寫眞に、又は記事に、慎ね說く可きを明かにせり、茲には交通其他を記し置かん。

■交通上の好位置　成田は、交通上の好位置を占め、汽車は、東京上野驛よりするものと、同じく兩國橋驛よりするものと、香取郡佐原驛よりするものとの三線及び多胡より來る輕便鐵道あり、成田より上野驛に達するものは、東武、野田常磐線に連絡し、兩國橋に達するものは、總武、房總、東武の各線に連絡し、而も上野成田間、兩國橋成田間は共に僅に二時間程に過ぎず、佐原線は利根川流域の汽船に連絡するの外、香取鹿島參詣之による可く、多胡輕便線は芝山仁王山倉第六天に發する者に便あり、電車は即ち成田山門前を起點として、成田驛前を中心に、義民木內宗吾を祀れる宗吾靈堂に達し、往還頗る便利なり。

■成田町の籠勢　成田町は下總國印幡郡の東部に位し、和名抄載する所の山方鄕十一ヶ村の一にして熱田或は鳴田とも書せり、元は農家三四十戶の僻邑に過ぎざりしが、本尊明王の遷座より次第に繁榮して、今や戶數一千七百、人口一萬有餘、縣下第一の熱鬧

地となれり。殊に不動明王門前通りの如きは、三層四層の大厦甍を並べ官公衙、學校、銀行、會社等公共的の建設物僅はらざるなく、土地柄として旅館幾十其設備の麗る大なるあり、菓果を始め、御夢想藥に其他に、名物土產物として數えらるゝものまた多し。

■成田山講社　成田山講社の歴史は、古く元祿以前よりのことにして、明治維新後、新に規約を定め、教部省の許可を得たるものなり。本山の認可を得たる結社數は約三千にして、而して一講の講員少きも二三百人を下らず、多きは即ち十萬人の上に出づるものあり。左れば、號して二百萬の信徒といふもの、決して誇張の數にあらざるなり。且つ是は本山の認可を得たる結社數にして、認可を經ざる私的團隊に至りては、其數實に幾何なるやを知る可からず。若夫れ講社にも團體にも加はらざる個々の信徒に至りては、蓋し講員數に倍蓰するものあらん。

■日月牌　日月牌堂は、本山大師堂内に設けあり。自他宗を問はず、各々其先祖父母親戚等の戒名又は俗名を日牌に、又月牌は過去帳に生存の人は現在帳に記し、施主の喜捨せし淨財を積み置き、永世不朽の方法を設け、日牌は毎日香花燈明を供へ讀經して慇懃追福を營み、月牌は毎月忌辰に當り、同じく香花燈明等を備へ讀經して先亡の冥福及び施主の現在併せて二世の安樂を祈る。倘春秋の彼岸盂蘭盆會等には特に加持の大會大施餓鬼を修行せらる。

■護摩木山　護摩法は、佛說によるに五穀を始め草木百花等の諸種を法によつて調和し、これを本尊に供養し、修行者の心と本尊の御心と融和合同に至らしめ、諸願成就を願ふことなるが、其昔寛朝大僧正が本尊の靈像に向ひ、この法を修して朝敵を調伏せし古例により日々これを修せらる。縣道に沿ふて酒々井驛より成田驛に達する約二里に亘る左右の森林は、概ね信徒講中より寄附せる護摩木山にして、處々に奉納何々講と刻せる碑石の建てるを見る。

■出張所及教會所　當山本尊不動明王の靈威赫々として海内に遍く、各地に出張所又は教會所增加し來り、中にも宏大なるは、東京深川公園内に在る不動堂なり。靈像は丈三尺餘にして兩童子を備ひ、弘法大師の御作と傳へらる。元佐倉城主稻葉正通の寄附する所、江戸開帳當時留守居本尊とし、後淺草藏前岩清水八幡宮及び深川吉祥院に遷し、更に今の堂宇を新建して入佛式を行へり。其他東京市内に出張所多く、彼の横濱の野毛山三河國岡崎、武州川越、上州高崎、北海道札幌の出張所の如きは、殊に最も宏壯繁榮を以て稱せられあるものなり。（完）

宗吾霊堂記

宗吾霊堂　宗吾親子の墓　弔霊碑　鳴鐘山東勝寺　大佛頂寺　宗吾の舊宅　甚兵衛渡

無學吟社同人句集

高原の麓きを秋の霧流る　雨柯
夕刻に物足らぬ秋の夜頃　翡素風
夕日彩る淺き入江や芦の花　吉子
立ち枯れの柔に風あり鳥さわぐ　静囀
秋の夜を壁に對して静座　翡素葉
鳥威す鋸切れしまゝの畑哉　春花
鶏追へば高く飛びけり秋の雲　湘水
玉川は鶏に暮れて瀬音哉　酉水
日當りや鶏ふくれて靈静か　靈鶯
敗荷や蓮なり折れて水淺し　歌村
鉦音や芦の花飛ふ水の上　和生
炊煙の淡き小家や柔高し　風柯
柔たるゝ湖上静かに秋の雲　如春
叢て空見上るや鳴く鶏　佳祐
沼へりに赤蜻蛉干すや芦の花　爲谷
雀とまれば柔穂たわみて飛立てり　夢申
木槿咲つた焉めに菊も咲ほれけむ　溪人

宗吾靈堂

不動明王と木内宗吾

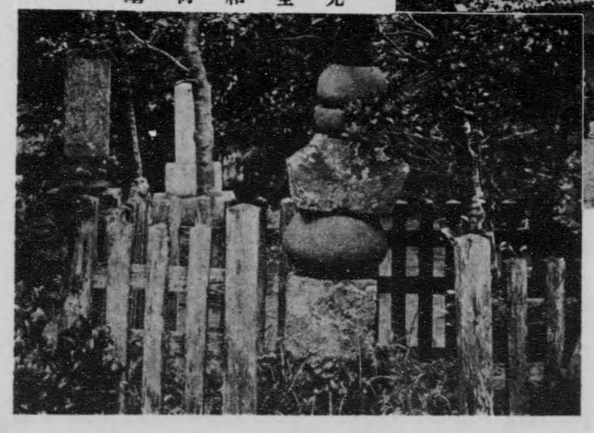
公津ヶ原といふは、今の宗吾廟堂から論田の邊り一帶、總てゞあつて、宗吾の生家と、今の成田不動尊とも、相距る遠からず、而して、宗吾留魂の處と、不動尊最初の安置の地とは、更に甚だ近い。地と、人と、境とを聯ねて稽ふるに、一念不動、眈眈たる、人と、信仰の人、成田山不動明王を尊崇して其靈威靈德を仰いだものと想はれる現に『佐倉義民傳』には『宗吾の生家たる公津村寺方は成田不動尊に近く、宗吾に不動尊の信者であり、また成田に道場を開いて居た山崎見龍と云ふ浪人の許に通つて撃劍を稽古した』宗吾は、初冬の寒き一夜、成田から歸村の途次、鎧谷といへる邱山に差懸れるに、山中なる二ノ宮權現の神前に水を浴びつゝ、祈誓を籠むる少女を認めて、仔細を尋ね、貧家の孝女、老母の重病に罹れるも醫療さへ心に任かせぬより、切めて神佛を祈る可く夜毎々々此の神垣に來り、吾身を以て母の命に代りたしと祈るなりといふを聞き、感に堪へず、思ろに勞ばり慰め、賜後何くれとなく世話しけるも、天命いたし方なく母遂に歿りしかば、忌明けし後、妻女に迎へたる其女こそ貞烈比びなき阿三である』と說いた一節もある。

宗吾親子の墓

鳴鐘山東勝寺

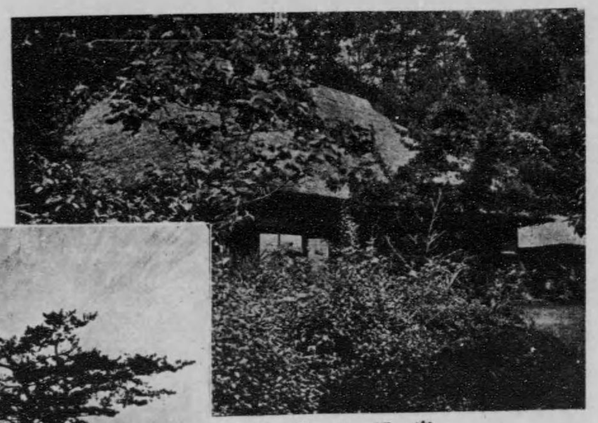
東勝寺前庭

大佛頂寺



光全和尚墓

印　　塘　　沼



宗吾の舊宅

甚兵衛渡

宗吾靈堂記

成田を距る一里八町、同じ印旛郡なる公津村に宗吾靈堂在り。その間、電車の便によれば僅に二十分を要するのみ。成田山に詣づるの客は殆ど必ず此所を拜し、此所を拜するの人は、また殆ど必ず成田山に賽するを常とす。二百六十餘年の昔、佐倉藩の苛政に泣ける領民を水火の中に拯はんとて、制禁を犯して將軍に直訴し、所願は即ち遂に貫き得たりと雖も、身は忽ち極刑に處せられて、一家悉く慘烈の最後を遂ぐ。その人即ち『佐倉宗吾』の名によつて或は劇に演せられ、或は講談に、或は活動寫眞に、世間口といふ口、筆といふ筆苟も義民を說けば皆直ちにこれを語る。而して語るも涙、聞くも涙、見るも亦涙ならざるはなし。あゝ、その人を祀れる宗吾靈堂實に此所に在り。

宗吾靈堂　義民木内宗吾及び其子四人を祀れるものにして、東勝寺に屬す。宗吾が身を献げて佐倉領三百八十九ケ村の人民の爲に極刑に處せられ、一家一族其罪に觸れて慘憺の最期を遂ぐるや、閭鄕擧つて其義に感じ、其死を悲みて涙ながらに其小祠に香花を手向くる者の絶えざりしも、舊幕時代は、尙憚る所ありてにや其觀を大にするに至らざりき。其後時

代の推移と共に嘆稱欽仰ます〳〵加はり殊に明治維新以來民權の發達と共に其聲名は滿天下に傳唱せらるゝに至り且つ住職田中照心師最も心力を竭す所あり明治十一年新に堂宇の建立を企て或は信徒を勸化し或は寺田を奥する等拮据經營明治二十年に至り本堂及び五靈堂供養堂念佛堂太師堂額堂の竣工を見結構壯麗人目を眩し成田山に次ぐの美觀を謳はれしが明治四十三年の大火に諸堂宇また其厄に遭ひ擧げて烏有に歸し畢んぬ爾來假堂に奉祀し來れるも田中僧正は高齢の身を以てして不屈不撓更に大規模の再建を計り非常の苦心奮發の下に宏壯偉麗なる新本堂今將に成る。

圖宗吾親子の墓　靈堂に向つて右石垣を遶らせる中に在り香烟縷々として絶ゆる時あらず參詣の客覺えず涙にくれて低徊去るに忍びざらんとす。

圖弔靈碑　明治二十六年中有志宗吾及び之と事を共にしたる五義民の爲に弔靈碑を建て時の衆議院議長星亨之が文を撰しき左の如し。

木内宗吾獄外五兵之碑銘

德川氏治世三百年、其間義人烈士有功名節者何限乎。而不見書籍之載、不避斧鉞之誅、捨身力訴、拯民水火、屹然爲民權唱首者、以木内宗吾等爲其魁首矣。宗吾者、下總國印旛郡公津郷人也。世爲里正、領主堀田正信廚暗、寡臣弄威福私、聚斂無度、民不聊生、宗吾、會領域三百八十九邨里正於公津之野、決議赴于江戸、訴于藩邸乎幕府、皆不聽、宗吾意有所決、勸衆返歸、稍怪與瀧澤里正六郎兵衛、高野里正三郎兵衛、下野田里正惣右衛門、千葉里正忠藏、小泉里正

半十郎五人、留待時機、承應元年十二月、開將軍家綱謁東叡山湯東照宮、其當日、宗吾會五人、告曰、吾先君殺身、若不成則、請子繼爲計。是夜入書院下、二十日朝、將軍至、駐蹕徒步、將入拜殿、宗吾揮訴狀於輦側、直前踐地、呼曰、告曰、黑世領主、租斂苛仍窮矣。及乎今代、基設苛法、乃對一斛、徵租一斗二升、諸稅亦準之。百姓困苦、愿無陳情、不者。更拘黑背、倘執長斧、殺東國門、急子星火、全領戮尸八百八十、廢寺十一、散面之四方者千七百三十人。其流涙、或飢寒轉乎溝壑、或窮厄爲盜竊。則是苛領地之名、顯付吏之失也。且訴求無獄、黑國將塗、爲之、所以不憚嚴誡、曾伏乞哀也。將軍謹聽、有所減飭、無爲組法、復舊、領民安堵、吾臣汚吏減自殺、或底罪。有司以宗吾等、爲犯大禁者、舊沒田宅、二年八月磔宗吾於公津之野、年正四十二、其四子皆斬。又逐六郎兵衛等五人。東勝寺尼及宗吾二女、請父子免罪之、今墳墓是也。宗吾寒到髮竟伶、五人亦爲尼、不知所終。在昔武門之世、人主之感、非特萬鈞也、一觸其怒、則頭足異所、誅得抗乎。宗吾以時々之見、直犯將軍之感、以彈劾領主、震撼一門熱血、以救佐倉十萬生靈、陣感肌發、雷轟電駭、震動天下耳目、蓋使封建君主知暴欲苛征之可戒、其大道民權可謂偉矣哉。其地志士深欽其義、欲建碑紀勳、使余銘之。余謂、方今世局全變、法重民權、政貴自由。而如千葉縣、特多富自由志氣者、抑宗吾等、這風餘烈、啓發感學人心之所致乎。乃國運開進、奮人烈士往行、或有興時乘隙者、而宗吾等終重天下矣。昔以義民見稱、今爲民權家奉斗、往々二百五十年、猶覺覺々有生氣。所謂異日之玉、經年所益發光者、夫宗吾等之謂乎。因作之銘曰

鬱鬱拯獄　若狐若豹　炊烟疎冷　鼠者弗食
勞苦弗息　朗々晉謁　民乃作歌　偉識烈士　猶將騰起
一封披雲　燈波氣究　功迫山川　血淚民恤　公津野發
事親于今　二百餘年　精靈勃々　當行于天

明治二十六年五月　衆議院議長　星　亨撰文

圖鳴鐘山東勝寺　新義眞言宗豐山派に屬す宗吾靈堂の守護にして堂に向つて左方に在り舊此所を距る數町の外に在りしが宗吾刑死の時住持其屍を乞ふて此處に葬り新に道場を設けたるなりと。

圖大佛頂寺　靈堂を距る十三四町岩橋村に在り山號を岩橋山といふその昔弘法大師大佛頂の法を修

したる所なりと傳へらる。更に傳說によるに宗吾の事ありし時其俗縁の叔父に當る光全和尙其住職たり、極刑忽ち下りて稚兒も共に刑戮せらるゝと聞き、光全憐愍に堪へず病餘の衰軀を以て刑場に馳せ付け哀を乞へるも許されず果てはまう〳〵無情の振舞をなすにぞ憤激勃發、兩人の稚兒を左右に抱き、刑場を破つて遁走し、一たび寺に歸りしも、役人に追はれて逃るゝに途なく兩兒を抱きたるまゝ遂に印旛沼に投じて死すと。寺に和尙の墓あり。

圖宗吾の舊宅　また靈堂を距る十餘町、宗吾の舊宅、今尙存す。舊宅は前に靑田を眺め、宅地の南側の入口に竹籔あり、北の行詰まる所また竹籔なり。茅葺の無雜作なる平家にして、外に大きやかなる秣小屋及び風呂場見ゆ。母家は廣き土間を有し、土間よりも將た外側の板椽よりも入り得べき十八疊敷の大廣間あり、佛壇其間に設けらる。涼風道閑居士と記せる宗吾の位牌と其子供等の位牌安置せらる。而してこの舊宅は境域竹藪及び畑をも入れて約二段歩あり。一旦官に沒收せられ、其後宗吾の妹の子孫され來りて復興し、今の利右衛門に至るまで十三代、舊宅依然宗吾の時の觀を改めずといふ。

圖甚兵衛渡　劇に、其他に、普ねく傳へられて、その人と地と感興禁せざらしむ。

『成田山』發行に就て

余等同志、成田山靈德奉讚會を設け、先づ其事業の第一着歩として茲にこの『成田山』を刊行するを得たるは、衷心、欣幸とする所なり。殊に深厚なる翼賛の下に、全山に亘りて多數の寫眞を收め、而も、其寫眞たる、從來秘寶として內殿深く藏せられ、若くは堅く金網にて鎖されある類に至るまで、一切之を開放して撮影することを許され、隨つて容易に見る可からざる貴重珍奇のものに滿つ。斯くて、成田山に關する此種の出版物としては、慥に空前の誇を與へられたるを感謝せざる能はず。而して、其能く之あるもの、實に平澤照尊師の導きによつて、成田圖書館主任高津親襄翁の知を得たるに基く。蓋し『成田山』刊行計畫以來、材料の蒐集に、寫眞の撮影に、其他に、翁の指教を煩はせるもの頗る多々。相延て淺井照次、成田善亮、石原吉太郎の諸氏を始め一山の重立たる人々の盡力に負ふ所、太だ多し。是、並に感荷に堪へざるところ。將た、寫眞は靑山忠勛氏、專ら其勞に任じ、出版印刷に關しては即ち、高橋一郎、赤羽正己諸氏より特段の配慮を受けたり。併せて茲に謝意を表す。一篇の『成田山』、斯の如くにして始めて完成す。若夫れ、之が頒布に當りて、更に篤信有德の君子の援助を得んことは、同志の特に、切に、希ふ所也。（編者記）

368

大正九年十一月二十日印刷
大正十年一月一日發行

成田山奥附
特製
正價金五圓

東京市下谷區茅町二丁目五番地
編輯兼發行者 佐藤一誠

東京市芝區愛宕町三丁目二番地
印刷者 赤羽正己

東京市神田區雉子町三十四番地
印刷者 高橋一郎

東京市芝區愛宕町三丁目二番地
印刷所 東洋印刷株式會社

東京市神田區雉子町三十四番地
印刷所 成章堂

著作權所有
不許複製

東京市上野池ノ端茅町貳丁目五番地
發行所 成田山靈德奉讃會
電話下谷二三〇八番

終